

No.168

2012.
3.1

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

我々大人は次の世代のために・・・

岐阜県先端科学技術体験センター 館長 飯尾 正和



今、我々大人は本当に幸せな人生を送っています。皆さん、そんな実感をお持ちでしょうか。見たい、聞きたい、知りたいと思えばテレビやインターネット等の情報機器によってそんな思いは

全て叶えてくれますし、家電製品によって非常に快適な余裕のある日常生活が送れ、交通機関の発達によって何処にでも気楽に早く安全に行くことができます。全てが科学技術の発達のお陰なのです。

戦後、たったの5、60年で日本はどうしてこんなに科学技術が発達したのでしょうか。それは、国民の欧米先進国の豊かな文化的生活への強い憧れと日本再建に向けて欧米先進国に追いつけ追いつ越せの国民の共通理解があったからです。人間の夢や欲望を次々と実現してくれる科学技術への国民の大きな期待とその期待に応えた科学技術者の熱意とが非常にうまく一体化した結果といえるのではないのでしょうか。2000年からNHKで放映された「プロジェクトX」の番組に登場した人達の汗と涙の努力が物語っています。

しかし、今、我々は人間として本当に心豊かで幸せな生活を送っているのでしょうか。科学技術は両刃の剣と言われます。20世紀が科学技術のプラスの恩恵を受けたのに対して21世紀になって科学技術によるマイナスの悲劇が生じ始めています。地球温暖化による異常気象、大気汚染等の環境問題、そして原子力発電所の損傷によるエネルギー問題等、我々大人が次代に残した大きな負の遺産となっています。一方、身近なところでは日本社会が集団から個の社会に大きく変化し、自己中心的な人間が増加し、親子関係や友人関係が脆弱となり、情報

の悪用とあいまって悲しい事件が多発する等、日本社会は取り返しがつかない方向に変化させられているように感じられます。

21世紀は科学技術と上手に共生して人間にとって本当に豊かな国づくりをする時代と言われています。その為には、国民一人ひとりが科学技術に興味関心を持ち、科学技術によって本当に素晴らしい人間社会を構築するという強い信念を持つことが必要なのです。

しかし、1990年頃のバブル経済全盛期を境に、日本は科学系社会から文化系社会に大きく転換し、国民の科学技術に関する関心度が急激に低下してしまいました。1998年の国民の科学技術概念理解度国際比較によると14の調査国の中で日本国民の科学技術への関心度は13番目、先進国の最下位です。それにともない、理科や数学が苦手な子ども達が急増し、いわゆる理科ばなれ現象が発生し、理工系学生が減少し、科学技術系人材不足が社会問題化し、日本の成長に歯止めがかかったように感じられます。

今後も科学技術は進化を続け、ますます科学技術化した社会になっていくことでしょう。そんな社会に生きる人間は科学的な考え方や科学的な正しい判断力、そして科学の基礎知識を身につけた社会人でなければなりません。

我々大人は、次の世代のために、全ての国民の科学技術に対する興味関心を喚起し、科学技術への正しい認識を持った社会人と、将来、科学者や技術者になり日本再建への強い意欲を持つ子供達の育成に真剣に取り組むべきではないのでしょうか。

ホンダ自動車の創設者本田宗一郎氏が「物づくりを止めた国は滅びる」と言っておられました。この言葉が現実にならないことを祈りたい。

第77回 会員研修会 報告

テーマ「美術の著作権」

日 時：平成23年8月4日(木) 13:30～16:30
講 師：甲野 正道 氏 (東北大学 理事)

会 場：岐阜県現代陶芸美術館 プロジェクトルーム
参加者：31名

今回の会員研修会では、著作権をテーマに取り上げました。平成19年度の第69回会員研修会でも「博物館・美術館における著作権」をテーマとして、弁護士の方に講義いただいています。それから4年後に、あえて再びこのテーマを取り上げ、今度は、文化庁の著作権課長を務められた甲野正道氏を講師にお招きしました。その理由、経緯について述べておきたいと思います。

平成23年度の会員研修会の計画について、平成23年3月に研修委員会において話し合いが持たれました。委員からテーマが十数件提案され、その内、外来講師による講義形式のテーマとして、数件のテーマに積極的な意見が集まりました。中でも著作権については、会員館で作品・資料をめぐって問題になることが多い上、特に近年は法の改正や新情報も増えているので、5年に1度くらいテーマにしても良いのではないか、ということになりました。また、平成23年の始めに全国美術館会議から『現場で使える—美術著作権ガイド』という本が刊行されたことも、話題となりました。そこで、著者の甲野氏にぜひ講師を依頼したい、という結論に至った次第です。

甲野氏に打診した所、快諾をいただき、この研修会の運びとなりました。講義は、まず「著作権制度の概要」について、基礎的なことからポイントをお話いただきました。内容は、保護される著作物、権利を持つ者、利用行為、著作権の制限などで、説明は専門家らしく「立て板に水」という調子で進行了。続いて「博物館の活動と著作権」について、私たちの実際的な問題に関わるお話をしていただきました。収集、展示、教育普及活動などに関して、著作権への対処の仕方や注意点を教えていただきました。



講義は2時間に及びましたが、その後、質問の時間をもちました所、参加者から多くの質問が出されました。たとえば、著作権者が分からない場合や、利用許諾手続きが必要か不要かのグレーゾーンに思われる場合、また使用料をめぐる問題などについて、具体的で切実な疑問が語られました。難問を含む多種多様な質問に対して、甲野氏は一つ一つ誠実に回答してくださいました。



このように、博物館・美術館の活動の核心に触れるテーマをめぐって、専門家の充実した講義を聴くことができた上、活発な質疑応答を伴ったことで、有意義な研修会となりました。

(岐阜県現代陶芸美術館 岡田 潔)

第130回 岐阜県博物館協会公開講座報告

「アラビア×フィンランド陶芸」展

関連企画『おいしいコーヒーとフィンランド』

期 日：平成24年1月21日（土）①10:00～13:00 ②14:00～17:00

会 場：セラミックパークMINO 1Fホワイエ

講 師：中垣 文寿氏（SHERPA COFFEE） 参加者：各回16名 計32名

岐阜県現代陶芸美術館では、平成23年11月12日から平成24年2月12日まで、「アラビア×フィンランド陶芸—北欧モダンデザインの変遷—」展を開催した。本展は、2011年が北欧を代表するプロダクトデザイナー、カイ・フランクの生誕100年という記念すべき年であることになみ、カイ・フランクが在籍したアラビア窯のあゆみを紹介すると共に、日々の暮らしの中に息づく素晴らしいデザインを改めて見つめ直すことを趣旨としたものである。

平成24年1月21日には関連企画として、シェルパコーヒー（岐阜市）の中垣文寿氏を講師にお迎えし、ワークショップ『おいしいコーヒーとフィンランド』を開催した。フィンランドの国民一人当たりのコーヒー消費量は世界一と言われており、アラビアの日用食器と共に、コーヒーはフィンランドの人々にとって生活に欠くことのできない大切なものであり、また文化となっている。このことになみ、今回のワークショップでは、コーヒーを通じてフィンランドの文化に触れていただくことを目的とした。



プログラムは、コーヒー豆の香りを楽しみ、さらにそれらをフレンチプレスで抽出した液をテイスティングする、いわゆるカップングからスタートした。講師の中垣氏は美味しいコーヒーを淹れるためにはまず個々人がそれぞれの趣向を知ることが重要であると考えておられ、プログラムを通して好みの香味を知ることには重きが置かれた。カップングの後、さらに好みを知るための、コーヒーの苦みや酸味、コクなどに関する講義が続いた。その後、中垣氏による抽出のデモンストレーションがあり、コーヒーの場合、酸味が先に出て、苦味が後から出てくるので、丁寧にゆっく

りと淹れることで、それぞれの特徴をしっかりと、そしてバランス良く表現できるといったレクチャーがあり、参加者の方たちは興味深そうに聞き入っていた。



その後、各自が抽出に挑戦し、それぞれのコーヒーを飲み比べる等した。同じ豆でも淹れ方によって、また淹れた人の性格などによって味が異なることを身をもって体験し、皆驚きの声をあげていた。

抽出は人数の関係上二組に分けて行われた。一組が抽出を行っている際にもう一組では、フィンランドのデザインに関するディスカッションが行われた。今回のワークショップでは、フィンランドのデザインに触れてもらうために、北欧デザインの巨匠アルバ・アアルトの“スツール60”を使用した。また、参加者の方へのお土産として、カイ・フランクがデザインしたカップ&ソーサー“ティーマ”が用意された。展覧会担当者よりこれらのプロダクトに関するレクチャーが行われ、参加者の方からも積極的に質問があり、また情報の共有も行われた。

中垣氏の丁寧なコーヒーの淹れ方は、日々の暮らしを丁寧に大切に過ごすということの重要性を参加者の方々に伝えて下さったのではないかなと思う。それはフランクやアアルトをはじめとするフィンランドのデザイナーがそれぞれのデザインに込めた思いとも共通するものである。

参加者の方々が、このワークショップを通じ、好みのコーヒーの香味を知り、大切な人たちと幸せなコーヒータイムを共有するための沢山のヒントを掴んで下さったことを願う。

（岐阜県現代陶芸美術館 山口敦子）

館・園紹介 No.147

みのかも文化の森・市民ミュージアム

〒505-0004 美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1
TEL：0574-28-1110
FAX：0574-28-1104
<http://www.forest.minokamo.gifu.jp>

みのかも文化の森・市民ミュージアムは、美濃加茂市のほぼ中央部・里山の丘陵地に2000年10月にオープンしました。

「自然との共存」「学校教育との連携」「市民参画」「地域づくり」の4点を館の理念とし、それにどれだけ近づいているかを振り返りつつ、「地域のために必要な文化施設としての博物館」をめざしています。扱う分野は、自然、考古、歴史民俗、美術などにわたり、小さいながらも地域の総合博物館です。毎年何本かの企画展、講座、学習活動などを多くの皆さんに支えられて取り組んでいます。

2009年の冬に「ていねいな暮らしがあったころ」という企画展を行いました。市内伊深地区に住んでいた民俗学者・佐野一彦が昭和30年代から40年代にかけ撮影した写真を展示し、「少し行き過ぎた」今の生活を考えてみようというものでした。この展覧会に連動し、展示ガイドボランティアが中心となり、展示写真に関する住民聞き取りや調査が行われました。そして、写真の撮られた風景の現在を歩いて見て廻る企画「道草～伊深の冬の里～」が開催され、地域の生活や景観を考える機会を多くの方々に提供しました。展示ガイドボランティアは、この展覧会以外にも館と共同でこのような住民交流事業をこれまでも数多く手がけています。



〔道草～伊深の冬の里～〕

昭和30年代の養蚕民家を復元した生活体験館では、地域の伝承料理を学ぶ「四季を食べる講

座」を月2回程度開催しています。その回数は開館以来延べ200回を超え、その内容のレシピ集が発行されるなど人気の催事となっています。その講師役であるボランティア「伝承料理の会」の皆さんはよく自家製の漬物を持ち寄ります。いつしか「この漬物を一堂に集めたらどう？」という提案がなされ、昨年1月に「漬物フェスティバル」なるものが初めて開催されました。開催にあたっては事前に、素材である野菜の作り方や収穫の時期など家々や地域での特徴などを調査し発表をしました。「市民」の方々の継続的活動を通し地域をテーマにした新しい企画が生まれています。



〔漬物フェスティバルの様子〕

館では、6つの分野のボランティア(22年度登録者160名)をはじめとして多くの方々が活動しています。その「市民」の活動は館のかけがえのない大きな力となっています。

博物館資料や地域にある資源は博物館のスタッフだけではなかなかうまく活用することができません。「市民」の新鮮な発想や手法、継続的な取り組みを通して、そのよさや特性が見直され新たな価値観が生まれることとなります。その人たちとの交流を通して、博物館利用者はより深く博物館と関わるができると思っています。

単なる1回限りの「イベント」でなく、博物館と市民の連動の積み重ねの中から、地域再発見の「もと」が生まれ、それがまちづくりの基盤になっていくことを願っています。

【交通】JR美濃太田駅北口より徒歩17分

【開館時間】9:00～17:00

(ただし、展示以外の施設利用は22:00まで)

【休館日】月曜日・第4火曜日

【入館料】常設展示：無料

企画展示：内容により無料と有料

(美濃加茂市民ミュージアム 可児光生)